

研究課題 (テーマ)		「手術侵襲の生体反応と回復過程における看護」の ICT 教材開発 -臨床指導看護師と看護学教員の共同開発-	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学科	教授	栞子 嘉美
分担者	看護学科	准教授	城戸口親史
	看護学科	講師	寺内 英真
	看護学科	講師	二本柳 圭
	富山県立中央病院看護部	研修科長	四十田真理子
	富山赤十字病院研修センター	看護師長	山本 百合
研究結果の概要			
<p>研究目的は「手術侵襲の生体反応と回復過程における看護」の学生向け ICT 教材を臨床指導者と共同で開発し、開発した教材が学生の周術期看護における臨地実習に適しているかを検証する。</p> <p>教材作成には、まず「周術期看護」とその実習に精通している教員間（4名）で、学修目標を一致させる検討を繰り返した。この際に留意したのは、看護系学士課程コア・コンピテンシーの「根拠に基づき看護を計画的に実践する能力-」と、「急激な健康破綻と回復過程にある人を援助する能力」の視点である。</p> <p>教員4名で検討を繰り返し、現段階で抽出された最終的な学修項目は、侵襲と生体反応、Moore の術後回復過程、術直後から回復期<「Moore の術後回復過程」の傷害期から転換期>、身体機能低下と合併症に関するアセスメントした看護として、系統的な観察項目や安全を守るためのライン類の管理、術後早期体動に関する15項目であった。</p> <p>その15項目について「妥当である」「妥当ではない」「どちらでもない」「分からない」の4件法で測定した。「妥当である」の一致率は88.3%であり、目標には達しておらず、最終的な学習項目の抽出には至っていない。ただし「妥当ではない」を回答はなく、「どちらでもない」が11.7%であった。</p> <p>教員間で学修項目の一致率が90%に至らない理由として、「周術期看護」において「手術侵襲」の知識だけでも理解するには、形態機能学や臨床医学の知識が多く含まれ、かつ時間的経過の変化の中で重要な看護の項目が多いことが考えられる。また、それらを端的に示す目標にするために、演繹的または帰納的提示かの学修方略を見越した内容にする必要がある。</p>			
今後の展開			
<p>学修目標の一致率を高める検討を続け、最終的な項目が抽出したい。また合わせて教材の構成、コンテンツを考え、教材を作成する。その際に臨床指導者の協力を得て画像を用いる。また、作成後研究参加者に、作成した教材の評価を行い、最終版教材の作成を目指す。</p>			